
「海の生き物を守る会」メールマガジン No.35

2009. 3.16 (月)



Association for Protection of Marine Communities (AMCo)

Homepage : <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

「今日の海の生き物」 スジメ *Costaria costata*

東北北部から北海道・北太平洋・アメリカ沿岸まで北の海の岩場の生育するコンブ科の海藻。葉状部の表面は凹凸の模様が顕著に現れ、明瞭な筋が5本ある。そのうち3本は表側に凸で、

2本は裏側に凸となるため、写真のように筋は3本のように見える。数mの大形海藻だが、1年生であり、



夏には枯れる。若い時期なら、食用にできるし、「ガゴメ」と称して、販売もされている。

(北海道厚岸湾大黒島にて 向井 宏撮影)

目次 「今月の海の生き物」スジメ

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース
2. 当会の現在の活動と予定
3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報
4. 海の生き物とその環境に関する出版物の紹介
5. 連載エッセイ (1) 「自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている」
横濱康継
6. 事務局便り
7. 編集後記
8. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

1. 海の生き物とその生息環境に関するニュース

【国際】

●IWC 議長が妥協案を提示

国際捕鯨委員会 (IWC) 議長が、日本の沿岸捕鯨を認める代わりに南極海での調査捕鯨を中止するという妥協案を提出し、日本とりあえず拒否をしたが、次回の IWC 総会に向けて最終的な交渉の詰めを行っている。日本は調査捕鯨を一部縮小する案で収拾したい考えだが、多くの国の反対が強く、調査捕鯨を完全にやめない以上は沿岸捕鯨を認められる可能性は低く、これまで態度を保留していたアメリカ政府が、オバマ政権になって積極的に反捕鯨の立場を明らかにし始めたこともあって、調査捕鯨に固執する日本政府は苦境に立たされるだろう。

オバマアメリカ政府は今回の IWC 委員会で「鯨を殺さない調査以外は認めない」と態度を明らかにした。南極海の調査捕鯨に固執するなら、日本は IWC から脱退して世界から白眼視されながら商業捕鯨を再開するしか道はなくなってきた。

【北陸】

●海岸林の再生を 能美市民らクロマツを植樹

石川県能美市の海岸保安林を守るために、石川県森づくり推進協会の事業「いしかわ県民参加の森づくり推進事業」の一環として、能美市民らが吉原釜屋町の海岸でクロマツの苗木などを植樹した。170人ほどの地元住民や協会関係者らが参加。地元の湯野小学校5年生も総合学習の一環で参加した。植えたのはマツクイムシに強いと言われるクロマツを500本、トベラ60本、シダレザクラ25本を松林の中に植え込んだ。海岸林の再生に植樹だけが有効かどうか、議論の分かれるところである。

【近畿】

●白良浜整備計画で「再検討必要」

和歌山県白浜町の白良浜（観光用にオーストラリアから白いサンゴ砂を入れて養浜）で高波の発生や砂の黒色化が問題になっている。原因を調べていた県と白浜町は「当初の計画通り海岸整備を進めることには多くの問題がある」として、整備計画の再検討が必要とする中間報告をまとめた。黒色化は夏だけではなく冬にも起こっており、問題が深刻化している上、砂の流出対策事業と関連していることが分かってきた。

03年には浜の北側の権現崎付近で、砂の流出を防ぐための潜堤建設に着手し、06年度で計画の90%が完成したが、07年に砂の黒色化が見つかり、工事を休止している。

調査では、砂の黒化は底質の貧酸素で硫化鉄ができたことが分かっている。この黒色層は海水浴場のほぼ全域で見られ、表面は白い白良浜も一皮めくれば真っ黒だということが分かった。原因は海水交換が停滞したため、有機物がたまったことだと推定した。潜堤工事が海流に影響を与えたことは間違いないため、県は再検討を強いられる。

また、高波については、養浜事業がもとの浜よりも2倍から3倍の急傾斜に作られたためだろうと推測されている。

県は「浜の防護機能・利用・環境」の面でバランスの取れた計画にすることが必要とし、関係機関や地元関係者と協議しながら具体的な見直しを進めたいとしている。しかし、観光用とはいえ、自然の海にディズニーランドのような発想で異常に白い砂浜を作ろうとしたことに無理があるはずである。その発想と工事を見直さない限り、この種の問題はいつまでも無くならないだろう。

●間伐材魚礁の集魚効果を確認 豊岡・津居山沖

兵庫県豊岡市農林水産課では、同市の津居山沖に間伐材を巻き付けた魚礁を一年前に沈めたが、このたび調査してマアジなど魚の群れが周辺で確認され、一定の効果があったと発表した。調査は水中テレビによって魚礁周辺を撮影し、魚種と個体数を推定した。確認された魚種は、マアジ、ウマヅラハギ、マダイなど。

魚礁は高さ13mで、鉄鋼製の柱に但東町内の市有地で伐採したヒノキの間伐材約50本を枝や葉がついたまま巻き付けたもの。

調査結果について、農林水産課は「早期の効果が認められた。来年度は、竹野沖の浅い場所に沈設してその効果を探りたい」としているが、間伐材がどの程度効果があったかは不明のようだ

●イカナゴの不漁が続く

春を告げるイカナゴのシンコ漁が瀬戸内海で始まったが、かつてない不漁という。原因はいろいろ言われているが、砂に潜って生活するイカナゴのすみかである砂が、瀬戸内海

の至る処で関西空港の埋め立てなどに使うために過剰に採取されてきたことや、海底の貧酸素化が進んでいることなどが考えられる。

●那智勝浦の太田川でシロウオ漁

ハゼ科の魚シロウオが和歌山県那智勝浦町下里の太田川河口で昔ながらの漁具「四つ手網」を使って行われている。漁は2月下旬から3月下旬までの一ヶ月で、地元では春の風物詩となってアマチュアカメラマンが大勢集まっている。

シロウオ漁師も高齢化がすすみ、現在は5人だけしか残っていない。捕獲したシロウオは市場に出されることもなくなって、もっぱら親類や近所の人に分けて食べられているという。

【中四国】

●高知でサンゴ保全シンポジウム

「サンゴの海の保全を考える・黒潮圏のフィールドから」と題したシンポジウムが8日、高知市で開かれ、奄美群島の与論島を事例に、サンゴ礁の再生方法を探った。

●「千年サンゴで活性化」牟岐で住民ら地域づくり学ぶ

徳島県海部郡内の住民団体でつくる「かいふ塾実行委員会」は、牟岐町灘の貝の資料館「モラスコむぎ」で第1回の講座を開いた。初回は30人が集まり、千年サンゴを地域づくりにどう生かすかについて議論した。

最初にモラスコの館長で、NPOカイクネイチャーネットワーク理事の水上雅晴さんが講演。「カイクの自然を地域の活力へ」と題し、ハマサンゴでは世界最大級とされる高さ約9mの千年サンゴを紹介した。NPO徳島共生塾一步会（徳島市）の新開善二理事長も講演、「市民と行政が協働すれば大きな力を発揮できる」と述べた。

●マガンの北帰行始まる

島根県の宍道湖で越冬していた天然記念物の冬鳥、マガンの北帰行が始まった。群れになって北の国の繁殖地へ向かっている。マガンの集団越冬地としては国内最南端の宍道湖では、今年最大4000羽以上を数えた。例年3月20日ころにはほぼ北へ帰ってしまうと言うが、今年は少し早いのかもしれない。

【沖縄】

●埋め立てからオカヤドカリを救え

那覇空港からの道路建設などのために埋め立てが計画されている沖縄県浦添市の西洲海岸から国の天然記念物オカヤドカリなどの生き物を同市港川海岸に移植する作業が行われた。作業を行ったのは、浦添市の依頼で移植計画策定に協力した「しかたに自然案内」の

鹿谷法一さん、麻タさんと港川小学校の児童ら。自然海岸の貴重さや開発の在り方について学んだ児童らは、オカヤドカリだけでなく、ガニやナマコ、カノコガイなどの海の動物を1時間かけて捕まえ、港川海岸のできる限り元いた場所に似た環境を探し、岩場や水中、ヤドカリがすみそうな草むらに一匹ずつ丁寧に放した。作業を終えた児童らは「絶滅しそうな生き物がいるのなら大切にしたい」「まだたくさんの生き物がいる。埋め立てる前に全部を救いたい」などと話していた。

移植はオカヤドカリの保全対策を義務付けられた浦添市が同校に協力依頼して、環境学習の一環として行われたものだが、道路建設を前提としたヤドカリたちの移植にどれだけの意味を見いだしたのだろうか。それとも移植が大事だと教わっただけだったのだろうか。

2. 当会の現在の活動と予定

● 「海洋シンポジウム」にご参加下さい

「海の生き物を守る会」では、3月28日（土）に、東京弘済会館でシンポジウム「海洋環境の保全」を同封のポスターの通り、海洋環境政策ネットワークとの共催で開催します。

海洋シンポ

「海洋環境の保全 - 海洋生物とその環境保護・保全の政策化をめざして -」

とき：3月28日（土）13:30~16:30

ところ：弘済会館・きく

参加費：1000円（海の生き物を守る会会員は無料）

主催：「海の生き物を守る会」「海洋環境政策ネットワーク」

後援：日立環境財団・セブーン・イレブンみどりの基金

連絡・申込先：海洋ネット事務局

TEL:03-5226-8843 FAX:03-5226-8845 e-mail: kobayashi@c-poli.org

● 今年の総会を開催（会員・入会希望者は集まれ！）

前述の海洋シンポジウム終了後、今年度「海の生き物を守る会」総会を開きます。弘済会館きくの間、16:30ころ、会員および入会希望の方はお集まり下さい。会場は近くの喫茶店を予定しています。

3. 海の生き物に関する運動・行事・他の団体の情報

【関東】

●長谷川博 鳥島調査 100 回記念特別企画 海のトークセッション

「アホウドリ：未来への飛び立ち」 長谷川博

スピーカー：長谷川博（東邦大学教授：OWS 会長）

日時：2009 年 3 月 20 日（金・祝）

場所：d-labo（六本木ミッドタウンタワー7階）

主催：OWS、スルガ銀行

参加費：無料

申込先：下記、スルガ銀行 d-labo ホームページから事前に申し込む

<http://www.d-labo-midtown.com/d-log.php>

●マリンサイエンスギャラリー

「東洋のガラパゴスー小笠原諸島の海の生きものー」

場所：千葉県立中央博物館分館海の博物館（千葉県勝浦市）

日時：5 月 10 日（日）まで開催

この企画展示では、小笠原諸島の海の生き物の多様性を、約 320 種の標本をはじめ、多数の写真・ビデオ映像で紹介しています。ふだんあまり紹介されることのない生き物もいろいろと展示しています。

●干潟を守る日 2009 参加イベント

緊急シンポジウム「救え、沖縄・泡瀬干潟とサンゴの海！

～判決無視の埋め殺し工事をストップさせよう!!」

沖縄本島東海岸に位置する泡瀬干潟は、砂・泥・海草藻場・サンゴ礁など多様な環境を有し、貝類、甲殻類、ゴカイなどの底生生物、海草、サンゴ、鳥類、魚類など、そこにすむ生物の多様性は国内有数、生物量も大きく絶滅危惧種や新種が多数生息するなど世界自然遺産にもなりうる重要な環境です。そんな生きものの楽園が、今、土砂で埋め殺されようとしています。

沖縄県と沖縄市が計画している海洋リゾート事業と、そこに隣接する新港地区で内閣府沖縄総合事務局が実施している港湾整備が一体となった中城湾港の開発整備事業。港湾整備で排出される浚渫土砂が泡瀬干潟地区のサンゴの海に投入されているのです。

ずさんな環境アセスメントのあと開始された埋め立て事業は、昨年 11 月の那覇地裁判決において、経済的合理性がないと厳しく指摘され、県と市に公金支出の差し止めが命じられました。しかし、国は、この判決を無視して、1 月中旬より干潟への土砂投入を進めてしまいました。

このシンポジウムは、泡瀬干潟で今起きていることを検証し、無駄な開発事業から泡瀬干潟とサンゴの海を救うために、私達に何ができるかを考えていきます。各党からの国会議員にもお集まりいただき、政治解決の道を探っていきます。

日時：2009年3月17日（火）18:30～21:00（開場 18:15 予定）

場所：エデュカス東京（全国教育文化会館）7階大会議室＜定員 180名＞＜地下鉄有楽町線・麴町駅から徒歩2分＞ 東京都千代田区二番町12-1 （TEL：03-5210-3511）

参加費（会場と資料代）：一般 1000円、学生 500円

主催：泡瀬干潟を守る東京連絡会、泡瀬干潟大好きクラブ

後援：泡瀬干潟を守る連絡会、（財）日本自然保護協会、（財）日本野鳥の会、WWF ジャパン、ラムサール COP10 のための日本 NGO ネットワーク

主な内容：

- ・泡瀬地区埋め立て問題の解説・・・前川 盛治（泡瀬干潟を守る連絡会事務局長）
- ・泡瀬干潟の生物多様性と保全の意義・・・山下 博由（泡瀬干潟生物多様性研究会代表）
- ・埋立事業ありきの環境アセスメントと市民参加の欠落・・・

開発法子（日本自然保護協会保全研究部長）

- ・沖縄出身歌手による島唄
- ・各党議員を交えてのパネルディスカッション

「泡瀬干潟を無駄な埋め立て事業から救うために」

- ・干潟を守る日宣言

【問い合わせ先】

陣内 隆之（泡瀬干潟を守る東京連絡会）TEL：090-8179-2123、 FAX：04-7154-5629

Email：bi5t-jnni@asahi-net.or.jp 〒270-0115 千葉県流山市江戸川台西 4-110

水野 隆夫（泡瀬干潟大好きクラブ）TEL：090-1944-0345 E mail: mahodoriz@orange.zero.jp

ちらしを下記サイトからダウンロードできます <http://sy.studio-web.net/wd/090317awase.pdf>

●「ノリ病気研究の現状と展望」

開催日時:2009年3月27日〔金〕 午後1時から

場所:東京都品川区 東京海洋大学 日本水産学会春季大会第5会場〔講義棟 32 番講義室〕

企画責任者：本多大輔（甲南大・理工）・川村嘉広（佐賀県有明海再生・自然環境課）・有賀祐勝（無所属）

1. 壺状菌の新学名の提唱と壺状菌の漁場における探索・・・本多大輔（甲南大）
2. アカグサレ菌の分類学的研究 東條元昭（大阪府立大学）
3. アカグサレ菌の越冬 生態とPCR法による探索 横尾一成（佐賀県水産課）
4. スミノリ病菌のフェージによる探索と防除 三根崇幸（佐有水セ）
5. ノリ病症名の妥当性と改正について 小谷祐一（西海区水研）
6. 総合討論 座長 有賀祐勝

企画の趣旨

現在、ノリ養殖は生産枚数 90 億枚、生産額は、約 1,000 億円にまで成長し、海面養殖主要種の地位を確保するまでに至っている。ノリ産業に寄与してきた研究は、品種改良、病気、養殖技術、加工技術など多岐に行われ、特に病気研究はノリの病気に関するシンポジウム（昭和 48 年 4 月、水産学会）において整理され、ほぼ 30 年が経過している。その間、遺伝子技術が発展し、新知見と養殖技術の創出もみられている。本企画では、近年のノリの病気研究の新知見を追加することによって、将来のノリ産業に係わる産学に寄与したい。

●ダイビングフェスティバル2009

毎年 3 万人を超えるダイバーが集まるお祭りです。ダイバーはもちろん、ノンダイバーの方もぜひご来場ください。

日時 3月27日(金) (10:00~18:00) 業界関係者商談日

3月28日(土) (10:00~18:00) 一般公開日

3月29日(日) (10:00~17:00) 一般公開日

開催場所 東京ビックサイト西3ホール 東京都江東区有明 3-21-1

入場料 今年も無料

【近畿】

●「瀬戸内の原風景 長島の自然」写真展とお話しの会

ここにしかない風変わりな貝や絶滅の恐れのある生き物が多く生息し、あふれるように魚がわき恵みをもたらす上関の海。その一角「長島」にいま、原子力発電所が建設されようとしています。隣の「祝島」で漁に生きる人々と近辺の住民は反対運動と訴訟を続け、いくつもの学会・研究者は環境アセスメントのやり直しと埋め立て計画の撤廃を求め計画を手続きの段階から批判しています。瀬戸内海で最後に残った本来の自然の姿を、写真と映像でご紹介します。全国ニュースで報じられることの少ないこの問題を知ってください。

日時 2009年3月31日(火)~4月5日(日)

場所 堺町画廊 <http://www.h2.dion.ne.jp/~garow/>

〒604-8106 京都市中京区堺町通御池下ル 電話&FAX: 075-213-3636

バス「堺町御池」停から徒歩3分；地下鉄「烏丸御池」駅から徒歩5分；阪急「烏丸」または地下鉄「京都市役所前」駅から徒歩8分

<写真展>

「長島の自然を守る会」制作の写真を展示します。 公開時間：11時~19時

- ・瀬戸内海本来の自然を残す長島の風景
- ・海中のにぎわい：スギモクの黄金の花畑、魚の群など
- ・絶滅が心配される海の生き物：スナメリ、カンムリウミスズメ、ウミスズメ、カサヤマシセンなど

・ここでしか見つかっていない貝の珍種：ヤシマイシン近似種など

・祝島の人々のくらしと4年に1度の祭「神舞」など

<DVD上映>「瀬戸内の原風景 長島（長島の自然を守る会 2006年製作、約30分）」を
随時上映します。

<上関の自然を語る お話の会>

上関の自然と人々を見つめる各分野の研究者が、その素晴らしさ、今起きていることを語
ります。とりうるもう一つの未来を考えてみませんか。

3月31日（火）18：00～19：00

「やり直しが必要な上関原発計画の環境アセスメント」

野間直彦（滋賀県立大学講師、日本生態学会上関要望書アフターケア委員）

4月3日（金）18：00～19：00

「祝島の生活・文化と住民の反原発運動」武田俊輔（滋賀県立大学講師）

4月4日（土）15：00～16：30

「上関の自然と漁業権・入会権」室田 武（同志社大学教授）

4月5日（日）15：00～16：30

「長島の貴重な海の生き物とその危機」

向井 宏（京都大学教授、日本生態学会上関要望書アフターケア委員）

お話の会の時間のみ、入場料500円（学生と18歳以下無料、祝島産びわ茶のサービスつき）。

4. 海の生き物とその環境に関する出版物の紹介

●宇野木早苗「河川事業は海をどう変えたか」 生物研究社 ¥1,680 pp.116
(2005)

同書の最後の言葉。ある漁師の主婦の言葉から

海は借り物なんよ

子供たちに返すときはきれいにしてから返そうね

これが私たちの合い言葉 (土田信子)

連載エッセイ(1)

「自分さがしの自然観察—私たちはなぜ生きている?—」

横濱 康 継(南三陸町自然環境活用センター長)

「海の生き物を守る会」会員で南三陸町自然活用センター長の横濱康継さんから、長文のエッセイが寄せられました。原稿は本に出版する予定で書かれたものですが、長い文章なので横濱さんのお許しを得て、今号から数回に分けて連載します。今回は予告編として目次と読み方についてのみお知らせします。本文は次号の「うみひるも」から連載します。お楽しみに。

「自分さがしの自然観察-私たちはなぜ生きている?-」

目次

はじめに

第一章 生きているとは

臨海実験所という名のオアシス

三陸の海辺のチビッコ研究所

泥田の上で悟る

夢のサロン誕生

第二章 自分を知る

電子顕微鏡で見る超ミクロの芸術

海藻との対話

多彩な海藻達が語る地球環境の歴史

海藻おしばで学ぶ

ウニ卵の受精に自分を見る

ヒトより進んだ植物の子作り

性とは

第三章 生まれたから生きている

愛という名の鉄格子

鉄腕アトムを産む権利

「生かされている」から「生きる」へ

ユズリハのように

第四章 余生を生きる

余生とは

童心に還る

光はごはん

晴耕雨読

帰りなんいざ

平家物語は語る

第五章 いのちについて

いのちの大切さ
人のいのちの大切さを学ぶ
なぜ死を恐れるのか
最大寿命 120 歳の壁
ヒトという悲の器
諦め
コンブはなぜ海の中でダシが出ないのか
おわりに

「私たちはなぜ生きている」(2008年に「自分さがしの自然観察-私たちはなぜ生きている？
-」と改題)の理念・概要等について

2003年11月27日(2009年3月6日修正)

横 浜 康 継

○ 内容

1. 誰でも一度は抱く「自分はなぜ生きているのか」という疑問への答えが本書の内容の中心となっていますが、これまで50年間以上にわたって生物学を学んで私が得た答えは「ヒトも生きているという性質を持った生物だから」で、これ以外に答えはないと考えております。
2. しかし「人はどのように生きるべきか」という問いには答えがあります。ヒトという生物に特有の能力は、子作りや子育てという他の生物と共通の営みを終えたあとの余生においてこそ十分に発揮できるはずです。つまり私たちは余生に入ってようやく、「人はどのように生きるべきか」という疑問に対する明確な答えを得ることができ、またその答えに従って生きることができるようになるのではないかと考えます。

○ 基本理念

生きているということは重荷を背負い続けているようなものですが、ヒトはそのことを意識してしまい、辛いとも思ってしまうという点で、唯一の例外的生物と言えます。そのためヒトは「悲の器」(高橋和己の小説のタイトル)とさえ言えるほどの悲劇的生物であるとみなすことができ、そのような生物の一生としての人生は、やはり「辛い」と形容するしかありません(このことは第五章最終節「コンブはなぜ海の中でダシが出ないのか」に集約されております)。

これまで「ヒトは他の生物とは根本的に違う優れた存在」という考えや、「人生はずばらしい」式の人生論が主流を占め、そして出版界を含むほとんどの人から歓迎されてきましたが、そのような自画自賛式の話と現実とのギャップが、若年層の非行や中高年者の自殺などの原因になってきたと言えそうです。

人生は本来「辛い」のであり、出産とは「辛い人生」を送らなければならない存在を新たに産むことなのだとして認識する必要があります。しかし生物であるヒトにとって出産は自然なことであり、そして生まれた私たちは「生きている」という性質を持った生物として生きている、と理解すべきです。つまり人生には本来目的は無いのです。しかし「如何に生きるべきか」という疑問には明確な答えがあるのです。

○ 各章の概要

第一章 生きているとは

「生きているとは」を知る手段について、34年にわたる下田臨海実験センターでの生活から志津川町の「チビッコ研究所」設立にいたる私自身の履歴に沿って述べております。子供や好奇心旺盛な子供に戻ったおとなが自然界の生物を観察したり、農業や漁業に従事してみたりすることによって、私たちも他の生物と同じように、太陽からのエネルギーの流れ（エネルギー転流）や、それと連動する物質のサイクル（物質循環）によって、エネルギーやさまざまな元素を供給されて生きている、ということがわかります。志津川町（2006年10月に歌津町と合併し南三陸町となった）のチビッコ研究所はそのことを学ぶための拠点です。

第二章 自分を知る

「自分」を知るための楽しい実践的な学びを提案し、さらに私たちの子孫がこれからも生きてゆく場としての地球の環境問題から、生物としての私たち自身を論ずるには避けて通れない「性」の存在理由まで、本質的な理解が得られるように、平易な解説を試みております。

実践的な学びとしては、オゾン層をつくり現在でも養殖ガキばかりでなく、ほとんどすべての海洋生物の栄養源となっている植物プランクトンなどの微生物について、走査型電子顕微鏡も使って観察する体験をはじめ、海と地球の環境を学ぶ海藻おしば作り、自分の祖先の形そして母体内での自分の姿を知ることのできるウニの卵の受精と胚発生の観察などについて紹介しました。

第三章 生まれたから生きている

本書の中心的命題である「私たちはなぜ生きている？」への答えが、本章のタイトルである「生まれたから生きている」です。人生は辛いけれど、生きているという性質を持った生物として生まれたから生きているのだ、というわけですが、ヒトが子を産むということは、「辛いと意識しながらも生きていることになる存在」を新たに生み出すという意味で犯罪的な行為であるという、世間から総攻撃されそうな主張から始まります。しかしこの主張を真に理解すれば、我が子に対する虐待などが全く身勝手に如何に罪が重いかということも理解できるはずで

本章では親子関係という非常に重い問題を扱っているのですが、第 2 節の「鉄腕アトムを生む権利」では、クローン人間というきわめて今日的な問題について、厳しい批判を試みました。クローン技術に関連して、老人の延命技術の愚を論じ、さらに余生を如何に生きるべきかという問題に至り次章につなげます。

台四章 余生を生きる

前章の最後を受ける形で余生の過ごし方についての提案を試みております。まず余生に入るまで宿題として残されていた思春期の疑問を解くために、童心に還って自然界での観察を行い、さらに晴耕雨読することを勧めておりますが、晴耕つまり一次産業に老人ばかりでなくほとんどすべての人が従事することこそが、地球環境破壊による人類の破局を回避する唯一の道であるとも論じております。

第五章 いのちについて

「生」とは「いのち」を持った状態なので、最終章でいのちを扱うことにしました。ほとんどの人は「いのちは大切」と思っていながら、とくにその理由を考えることもなく、またたずねられても明確に答えることもできないようです。しかしほとんどすべての人は「生きていたい」と願い、そして愛する近親者や友人の死で深く悲しみます。他の人も同様であるということを、ヒトという動物だけは想像でき、さらに共感や同情というヒトに特有の心のはたらきから、自分と同じように「生きていたい」と願っている、そして親族や友人から愛されている人のいのちを奪わない、さらには守ってやろうと思うこととなります。これはシャカの「自分がしてほしくないことは他者にもするな」という教えに従うこととなります。

「いのちは大切」は「互いのいのちを大切にしよう」という約束を意味していると言えます。これに対して「いのちは尊い」という誰かが一方的に決めたようないのちの価値観はむしろ危険であると言えます。

さらに「ヒトはなぜ死を恐れるのか」という問題から、死を恐れる心を持った唯一の動物としての人類が出現したことの悲劇性について、これを無視したり否定したりすることなく、直視することが必要であると訴えております。

最後に暗い雰囲気 breaker 効果をねらって、コメディアンコンビの唄う「コンブはなぜ海の中でダシが出ないのか」という疑問に答えることにしたところ、生きているとは「濃度勾配に逆らい続けている」つまり「人生とは重荷を持ち上げ続けているようなものだ」という、大変わかりやすいけれど、辛い結論に達してしまいました。そしてそのようにして生きてゆかなければならない幼い「悲の器」やこれからも生まれ続ける「悲の器」のために余生を捧げるのが最高の生き方であると結びました。

本書の読み方について

各節は独立したエッセイとして通用し、前のほうを読まないと後のほうが理解できないということはありませんので、興味を持ったところから楽しみながら拾い読みして下さい。

6. 事務局便り：

- 講演での講師派遣を希望される方は、事務局へお問い合わせください。沿岸の生物やその環境についての問題、沿岸生態系の構造、保全、再生、地球環境問題、環境教育などに関する講演を行うことができます。
- 本会へのカンパをお寄せください。口座は埼玉りそな銀行指扇支店 3896180。
- 企画案などその他なんでも本会の活動に関することは、事務局あてにお寄せください。
- このメールマガジンは、毎月1日と16日の2回発行の予定ですが、都合によって遅延や中止もあります。配信を希望する方、送りたい方がありましたらアドレスをお知らせください。また、パソコンを使えない方には印刷体でもお届けします。その場合は、郵送料をご負担していただくことがあります。
- このメールマガジンは転載自由です。海の生き物に関心を持っている方に広く読んでいただくために転送をお願いします。ただし写真を別の目的で使用する場合は事前にご連絡ください。海の生き物や守る運動についての情報など、また各地で行われている海の生物の観察会、研修会、その他の行事に関する情報もお寄せください。「うみひろも」のバックナンバーは、ホームページからダウンロードできます。
- 本会は自然観察会や講演会を各地で実施しています。各地で開催を希望される方、開催をお手伝いできる方は、ご一報ください。また、各地の団体との共催も行います。ごいっしょに講演会や観察会をしたいと思われる団体からも提案をお受けします。

7. 編集後記

年度末でみなさんお忙しいことと思います。いつも「うみひろも」をご愛読いただき大変ありがとうございます。元下田臨海実験所所長の横濱康継さんから、本原稿を投稿していただき、今号から連載エッセイを載せることになりました。いよいよ来号から本文を掲載します。乞うご期待。また、会員、非会員を問わずみなさまからのいろんな投稿をお待ちしています。3月28日には、本会の初の総会が開かれます。会員や入会を希望される方の参加をお待ちしています。(宏)

8. 「うみひろも」と「海の生き物を守る会」について

この「うみひろも」は「海の生き物を守る会」のメールマガジンです。配信が迷惑と思われる方は事務局までご連絡ください。「海の生き物を守る会」の趣旨および組織の概要は会のホームページ <http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html> をごらんください。

海の生き物を守るためになにかしたい！というあなたに！

会員募集中です！

会員は本会の趣旨に賛同できる個人・団体とします。会費は個人 2,000 円／年、団体 20,000 円／年。匿名による参加も可能です。会員は、当会の名前を使って各地で海の生物とその環境を保護・保全する活動を行うことができ、そのための助成金申請をすることができます。活動は当会の発行するメールマガジンなどを通して広く通知されます。入会希望の方は、事務局 hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp（向井）まで、氏名、住所、メールアドレスをお知らせください。

事務局員も募集中！

事務局を手伝っていただける人を探しています。パソコンでメールが使える環境にあれば近くにいらなくてもお手伝いいただけます。ただし、無収入ですので海の生き物の保全・保護に関心とボランティア精神のある方。

メールマガジン『うみひろも』第 35 号 2009 年 3 月 16 日発行

発行&編集人「海の生き物を守る会」代表 向井 宏

〒606-8244 京都市左京区北白川東平井町 23-1 グリーンヒル北白川 23

TEL&FAX:075-703-7205; 090-8563-1501

メールアドレス：hiromuk@mtf.biglobe.ne.jp

ホームページ URL：<http://www7b.biglobe.ne.jp/~hiromuk/index.html>

銀行口座：埼玉りそな銀行指扇支店 3 8 9 6 1 8 0

